

大和楽 お百度

林悌三作・清元栄三郎作曲・西川鯉三郎作舞

昭和四十七年十一月二七日に大阪新歌舞伎座で開催された「西川鯉の會」ではじめて発表された作品です。

ZBSテレビでも放映されました。

京都の舞妓が願かけをしてお百度を踏む姿をスケッチしたのですが、最近はこの姿を見かけることも珍しくなりました。

師匠は下駄の音、拍手を打つ音が何とも言えずお上手でした。

「わしが在所」「四条の橋」「淀の川瀬」「十日ゑびす」などお馴染みの曲が次々と出て来ます。

本日は清元と大和楽の掛合で演奏します。

京の中京の竹屋町 玉姫お稻荷さんに願かけても 願いの筋のお百度を 踏むも素足の石だたみ踊り上達しますように 一心腐乱と言いたいが も一つあの人に逢えるように それで旦那さんに知れぬように どうやらそぞろ浮足に 心も空に「ええお天気やなあ」

わしが在所は京の田舎の片ほとり 八瀬や大原に牛ひいて柴うち盤 床几頭へちよいとのせ梯子買わんせん かいな 黒木買わしやんせ

「そやあの人に逢うたんは祇園さんの宵山に四条の橋の上やったなあ」 四条の橋から 灯が一つ見ゆる 灯が一つ見ゆる あれは二軒茶屋の灯か円山の灯か そうじゃえ そうじゃいな あくるり回った立石の 願ゆえ百度くるくると 淀の川瀬のな 景色をここにひいてのぼる ヤンレ 三十石船 よいよいよいよいよいよいよいよい

「このお百度がほんまに叶うたら」 この世は仮の仇まくら 結ばれやすき 櫛の齒にほつれてみする洗髪 惚れたと言えべったり厚化粧 いやじゃと言えば どうやら小褌の水浅黄 したでもなし せんでもなし タベ結んだ単衣帯 長い詮議はまあおいて 後は何にも置炬燵

「何ぞええ事ないやろか」 笹に小判がなるような 十日ゑびすの売物は はぜぶくろにとりばちぜにがます 小判に金箱立烏帽子 ゆではすさいづち 束ねのし お笹をかたげて千鳥足 手拍子揃えて華やかに 舞の手には やすしめ太鼓 たれしも見に行く花の山 ちらと見初めし 幕の内 その花かたげて千鳥足

清元 京風流曙染

吉井 勇作詞・清元栄寿郎作曲・西川鯉三郎作舞

この曲は師 西川 鯉主催の「曙會」の十回記念を祝って、昭和三五年六月に作られました。

京の風流はちょうど南座あたりの四条河原で始まりました。

そして櫓の上の梵天に吹く風は今も変わりませんと唄い出し、朧月夜の鴨川の河岸沿いに展開する京情緒をしつとりと描いています。

四条・木屋町・淀・伏見・先斗町などおなじみの地名に綴られて夕方から明け方へと時が流れて行きます。

最後は「曙會」をもじって曙染の夜着の袖と結んでいます。

木屋町にあった師匠宅の離れ座敷で展開されたであろう物語を題材にしています。

そもそも京の風流は 四条河原の狂言座 阿国歌舞伎に始まりて 世に栄えしと聞こえたり それよりここに 幾春秋 櫓の上の梵天に吹く川風は変わらねど 柳は緑 いや深く 花は紅いとど濃く 夜の朧に誘われて 逢いたさ見たさ話したさ とんで木屋町河岸沿いの 灯影なまめく裏座敷 その夜の契りいつまでも 忘れまいぞえ 忘れじと誓う折から 川風に吹かれ吹かれて 心ウキウキと 宵の口説につい解けやすい 帯の枚方おじゃれか招く せめて一夜は天の川 泊りかえ泊らんせ 振り回されて水車 淀から伏見へしとんとんとんでおつち先斗町 目無し鳥でも羽がある 命がけなら一夜も寝ずに うつらながらに白々と 有明月の明けの鐘 明くれば 人目も恥ずかしい 曙染の夜着の袖

大和樂
お百度



西川 鯉



西川 充